北海道医報
ISSN 0913-0217　2011.8.1. 第1115号
発行人　北海道医師会長　長瀬　清
発行所　北海道医師会
〒060-8627 札幌市中央区大通西6丁目
TEL (011) 231-1432　FAX (011) 221-5070
URL http://www.hokkaido.med.or.jp/
E-mail info@office.hokkaido.med.or.jp　頒価 1部 250円

節風季

組織の新陳代謝のために

情報広報部長　山科　賢児

日本のリーダーは、いずれ退陣するらしいが、この時点では辞めていない。菅首相を取り巻く周囲があの手この手を使って辞任を迫っているが、首相は唯々諾々として従う気はさらさらないらしい。執拗に辞任を迫られても「へっちゃら」のようである。マスメディアもいろいろ画策しているが、倒閣の手法「内閣支持率」も何の効果もないようだ。ここまで居直れるのは精神的に余程タフなのか、それともとても真摯で、何か崇高な使命感があるのかと、いろいろ想像逞しくなる。「市民運動家」という特異な出自の首相はゲリラ戦術を駆使して、政治家を家業とするこ数年の歴代の首相が中途半端に職務を投げ出したのと比べ、誠に対照的である。

辞めたくない理由が何かあるのか、辞められない理由が何かあるのか。既得権を持つ勢力にとって、首相に続けられたら何か都合の悪いことでもあるのだろうか。または首相には何か強力な後ろ盾でもあるのだろうかと妙に勘ぐってしまう。辞めさせたいなら「次は私がやります」と名乗りを上げてもいいものを、誰も自ら手を上げようとしない。この危機的状況にさえ、退陣を迫るだけで魅力的なヴィジョンを示し指導力を発揮する候補者も現れない。お互いが揚げ足を取り合っていてはどうしようもない。新しい首相がまた方向性を示せず直ぐ辞めるくらいなら、理想のリーダーを求めることを諦めて、国民自らが日本の危機を乗り越えようと主張、行動を起こしてもいいのではないだろうか。「蚊帳の外」におかれている国民が一番迷惑である。

日本においては組織のリーダーを目指すなら、決して自ら手を挙げてはいけないようだ。充分能力があれば、意思を明確にした人物にやってもらえばいいのではないかと思うが、現実には自ら手を挙げて成功した例はなかなかない。むしろその地位を得ようとするならば、水面下で推されるように雰囲気づくりをしなければならないらしい。周りからの暗黙の賛意がなければその地位につけない。本音を出したり、周りから突出したりする行為は組織の意向にそぐわないとみなされる。それがよくも悪くも日本の伝統なのであろう。日本人は皆、同質であろうと意識し、異質なものを排除するという横並びの考え方は、グローバル化が必要な時代になりながらも、変わっていない気がする。

現実には、内部から組織を変えようとする試みは至難の業であり、変化の原動力となる異質な存在を排除しては自らの大きな損失となるのを、既存組織は気づけないでいる。時代の流れを的確につかみ、変化を恐れず、やり抜くリーダーでなければ現代の危機は乗り切れないのだが、残念ながら、社会はことごとくその誕生の芽を潰してきたようだ。これでは新陳代謝や、世代交代が起こるのは難しい。「出る杭は打たれる」を見ると次に続くものが出てこなくなってしまう。

東日本大震災の後、日本人の価値観や行動に変化が起きたであろうか。自ら声を上げ主張するようになったであろうか。一時は震災に対する支援、関心に盛り上がりを見せたようだが、やはりというか、翳りが見え始めている。節電対応、サマータイムの導入など、危機に対しては小手先で素早く対応して、日本人の特質は大いに発揮されている。しかし自らの意志を持って、根本となるものに対して意思決定はしていない。むしろ自ら主張することを諦めて、何かが起こるのを待っているようにさえ感じる。

二十年以上前のはるか昔に経験した日本の「繁栄」は今や夢物語である。だが新たなヴィジョンを見つけるには、試行錯誤を重ねる時間が必要である。それに組織が生まれ変わるにはタイミングがある。それを逃してしまうと再び来るチャンスをしばらく待たなければならない。民主党政権に変わった時は、「変化到来」と多大な期待をした。けれど今振り返ると、あれは変化の始まりのきっかけにすぎなかったようだ。東日本大震災は未曽有の自然災害であるが、それ以上の大きな外圧がかからないと、日本は真の意味で変わらないだろうか。今を例えるなら、明治維新前の幕末の混乱が始まったばかりの時期なのだろうか。組織の新陳代謝はこれから始まる。「これからだ」と期待し、今の混乱、混迷には一喜一憂しないことかもしれない。今をそう考えてはいかがであろうか。しかし途轍もない大きな外圧に対処できるように、「異質を取り込み、新しく変わる」柔軟な思考と、若く優秀な人材の準備を怠らないでおこう。